

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：14501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K19963

研究課題名（和文）20世紀初頭におけるクロード・モネの公的評価の形成に関する研究

研究課題名（英文）Study on the formation of the official evaluation of Claude Monet at the beginning of the 20th century

研究代表者

亀田 晃輔（Kameda, Kosuke）

神戸大学・人文学研究科・人文学研究科研究員

研究者番号：60962991

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、印象派の画家クロード・モネ（1840-1926）が、第三共和政期のフランスにおいて公的評価をいかに得たのかを明らかにすることである。美術批評家ギュスターヴ・ジェフロワによる「印象派の歴史」執筆（1894年）、リュクサンブール美術館への印象派作品の収蔵（1897年）、1900年のパリ万国博覧会における「100年展」への印象派の出品という出来事を通じて、クロード・モネを対象としながら印象派の公的評価を考察した。100年展によってフランス国家が、ナショナリズムの気運が高まるなか、美術におけるフランス派を確立、提示し、そこに印象派を含めたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

クロード・モネは、アカデミズムの規範に反発した前衛画家として知られ、前衛画家としての革新性が強調され、研究されてきた。しかし、モネの生前の世紀転換期には国立美術館に収蔵され、フランス美術を称揚する公的な展覧会にも出品された。つまり、前衛というイメージからは程遠い公的な画家として晩年に認知されていたのである。このモネの公的評価を扱った研究は欠落しており、この研究成果によって、現在まで続く印象派の評価を再検討できるきっかけとなるため、意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to determine how the Impressionist painter Claude Monet (1840-1926) gained official recognition in France during the Third Republic. Through the events of the writing of the "History of Impressionism" (1894) by the art critic Gustave Geffroy, the collection of Impressionist works in the Luxembourg Museum (1897), and the exhibition of Impressionist works in the "Centennial Exhibition" at the Paris Exposition Universelle in 1900, this study examines the official valuation of Impressionism, focusing on Claude Monet. The Centennial Exhibition demonstrated that the French state, in the midst of growing nationalism, established and presented the French school of art and included the Impressionists in the French school of art.

研究分野：19・20世紀フランス美術

キーワード：クロード・モネ フランス第三共和政 美術史 ロジェ・マルクス ギュスターヴ・ジェフロワ

1. 研究開始当初の背景

印象派の画家クロード・モネ(1840-1926)は、アカデミズムの規範に反発した前衛画家であり、サロン(官展)とは別に組織された、画商が主催する展覧会や美術批評家によって評価を高めていった。前衛ゆえに公的評価から無縁であったと理解されているモネであるが、実は、1897年に作品が国立美術館に収蔵され、また最晩年の大装飾画《睡蓮》は、オランジュリー美術館の一室を飾るために国家寄贈という形で制作されるなど、公的評価を十二分に受けた画家であった。しかしこの公的評価はどのような過程を経て得られていったのか、という研究は皆無である。

こうした研究の欠落の背景には、フランス近代絵画史研究が、モダニズム史観を中心に進められてきたことが指摘できる。この立場は、アカデミズムが権勢を振るっていた時代に前衛を主流とする歴史を構築し、その根拠に時代を切り拓いた新しい表現、つまり革新性を挙げる。しかしこの根拠自体、モダニズム史観が創出したものと批判されている。例えば、「近代絵画の父」と呼ばれるエドゥアール・マネ(1832-1883)の評価は、その革新性のために自ずと得られたのではない。むしろ、未完成作とまで揶揄された彼の作品にいかにも価値を付与させるかという、マネ周囲の擁護者のマーケティング戦略によって形成されたことが、稲賀繁美の研究(『絵画の黄昏 エドゥアール・マネ没後の闘争』名古屋大学出版会、1997年)によって明らかにされている。つまり前衛の評価は同時代から戦略的に形成されたのであり、その恣意性を読み解けぬままではモダニズム史観を脱することはできない。だがこの観点から前衛を再考する研究はいまだ少ない状況にあり、特に19世紀最大の美術動向であった印象派の研究はほぼ手付かずである。

こうした研究状況において、報告者は、印象派を代表する画家モネを対象として評価形成について研究してきた。19世紀の前衛画家の大半が評価を獲得しきる前に没したのに対して、モネは生前に名声を得た稀有な存在であり、評価形成の過程を再構築できる重要な対象だからである。実際、モネが展覧会に参加するにあたってその戦略を分析した研究が存在する[F. de Maupeou, *Claude Monet et l'exposition : Une stratégie de carrière à l'avènement du marché de l'art*, 2018]。しかし、当時唯一のメディアで大きな影響力を有した新聞雑誌における批評文や、それを執筆する美術批評家とモネとの関係の分析は不十分であった。美術批評家による評価が定まらなければ、前衛作品は突飛な表現の絵画でしかない。ゆえに前衛画家にとって美術批評家との関係は重要である。

そこで報告者は、美術批評家オクターヴ・ミルボー(1848-1917)に注目し、書簡などからモネと協力関係にあったことを明らかにし、モネの評価を上昇させる批評戦略を分析してきた。こうした批評戦略が功を奏し、モネの作品は、デュラン＝リュエルやジョルジュ・プティなどの画商との取引によって美術市場で高額で扱われるようになった。ただし、美術批評や美術市場で成功したとしても、それが国家買い上げや国立美術館収蔵などの公的評価に直結するわけではない。この公的評価はどのように得られたのか。

報告者は、博士論文の一章で、「フランス美術の100年展」を扱った。この展覧会は、美術行政官のロジェ・マルクス(1859-1913)が指揮し、アカデミズム陣営の反対を押しのけてモネら印象派を選出した経緯がある。このことは、彼らをフランス公式の美術史に組み込むことを意味し、モネの公的評価が高まる始まりを示唆する。博士論文ではここで考察を終えているが、マルクスは、かつて美術批評家としてモネを擁護し、その後出世して美術行政官となった人物である。つまり、モネの公的評価の一端はマルクスの恣意性に依拠していると考えられる。したがってモネの公的評価には、前衛に与して後に体制側となった美術批評家たちによる、国家公認の画家の決定をめぐる政治力学が介在していたのである。また印象派をフランス美術史に組み込もうとする動きは、美術批評家から後に美術行政官となったギュスターヴ・ジェフロワ(1855-1926)によっても為されてきた。印象派の歴史化をめぐる言説も公的評価に繋がっていく。このように、モネを考察の対象とし、彼の公的評価の形成を分析することによって、印象派を中心とするモダニズム史観を再考する道筋を立てることを課題とした。

2. 研究の目的

本研究は、晩年のモネが第三共和政期のフランスにおける公的評価をいかに得たのかを、国家公認の美術を決定する美術行政の言説を通じて明らかにすることを目的とする。従来のモネ研究は、モダニズム史観から彼の評価は当然であるとして、なぜ評価が形成されたのかを問うことはしてこなかった。これに対して本研究は、印象派の巨匠モネの名声を支える土台がいかなるものなのかを同時代の文脈から再考し、それも19世紀の前衛には無縁とされた公的評価の観点から分析する。20世紀に入った際、他の印象派が隠居するか没していたなかで、長寿であったモネは精力的に活動しており美術行政との関係も続いていた。ゆえに、モネの公的評価の形成過程を分析すれば、20世紀にアカデミズムと前衛の関係がどのように変遷していくのかを明らかにすることに繋がる。これは、モダニズム史観を超えて、前衛という美術動向がいかなるものだった

たのかという美術史上の大きな問題解決の足がかりになると期待されると考えた。

3．研究の方法

研究の方法は、言説研究が中心となる。印象派を歴史化しようと執筆された美術批評家のギュスターヴ・ジェフロワによる「印象派の歴史」、リュクサンブール国立美術館における印象派作品の収蔵、さらに 1900 年のパリ万国博覧会における「フランス美術の 100 年展」(以下、100 年展)を主な対象とし、これらの書物、出来事に関するテキストを分析した。リュクサンブール美術館収蔵に関する公文書や、100 年展を指揮した美術行政官のロジェ・マルクスが印象派の画家たちに出品依頼する私信などを参照し、具体的な内実を明らかにした。これにはフランス国立公文書館(ピエールフィット=シュル=セヌ館)や国立美術史研究所で史料の調査を行った。

また当時、国家買い上げとなった作品の傾向を調べるため、これらを実見することも必要であった。モダニズム史観で構築された美術史が主流であるため、前衛作品以外のものは地方の美術館に収蔵されていることが多い。海外調査の折に、地方の美術館に足を運び、可能な限り作品を実見するよう努めた。他方、とりわけ 100 年展では、パリ万博における催しであるゆえに、美術を国家の政策のために使用する意図がある。こうした言説に内在する政治性も明らかにする必要があったため、歴史学の知見も取り入れるよう努力した。

4．研究成果

初年度においては以下の研究を行った。

(1)第三共和政期において公的に認められた美術作品の性格や公認のプロセスを、美術史学のみならず政治史を中心とした歴史学の知見を活かしながら浮かび上がらせる。(2)それと並行してモネの作品が国家買い上げとなった事例を分析して、公的評価の形成を明らかにする。

(1)に関して、先行研究の整理や資料収集に努めた。美術と政治にまたがる研究だけでなく、政治史の領域も収集対象としたため、多くの先行研究を調査する必要が出てきた。

(2)に関して、モネの公的評価を調査するなかで、《ルーアン大聖堂》が 1907 年に国家買い上げとなり、その関連資料がフランス国立公文書館にあることをつきとめた。この事柄は、先行研究のなかではほとんど注目されていない。そこでフランス国立公文書館に赴き、国家買い上げに関する資料の閲覧、写真撮影を行ってきた。一方で、当時国家買い上げとなった作品はリュクサンブール美術館に収蔵されたのであるが、その収蔵期間が終了した作品はルーヴル美術館に入るか、地方の美術館に送られるかの二つに一つという運命をたどる。フランスでの現地調査では、その地方に送られた作品を実見すべく、リール、ナンシー、レンヌ、ナント、トゥールの諸都市の美術館に足を運んだ。これにより、当時の国家買い上げされた作品がどのような傾向にあるかを調べることができた。

最終年度では、フランス国立公文書館と国立美術史研究所で資料調査を行った。

リュクサンブール美術館の印象派などの作品買い上げに関する資料や、印象派の画家たちと美術批評家兼美術行政官のギュスターヴ・ジェフロワやロジェ・マルクスとの書簡を実見してきた。一方で、印象派作品が同時代に購入され美術館に収蔵された実例を見るために、ベルリンの旧国立美術館へ赴いた。こうした資料調査に基づき、口頭発表を行った。

ギュスターヴ・ジェフロワによる「印象派の歴史」の執筆(1894 年)、リュクサンブール美術館への印象派作品の収蔵(1897 年)、1900 年のパリ万国博覧会における 100 年展への印象派の出品という出来事を通じて、クロード・モネを対象としながら印象派の公的評価を考察した。結果として、100 年展によってフランス国家が、ナショナリズムの気運が高まるなか、美術におけるフランス派を確立、提示し、そこに印象派を含めたことを明らかにできた。これをもってフランス公式の美術史に印象派が参入したのである。

一方、2020 年代になって、印象派のヒストリオグラフィー研究が盛んになってきた。ただし、印象派の画家全員が没し、かつエドゥアール・マネの生誕 100 周年である 1930 年代における美術史編纂が主な対象となっている。印象派が生存していた 20 世紀初頭は研究対象から外れているゆえに、本研究を発展させていく意義は大きいだろう。本研究を基盤として、20 世紀初頭における印象派作品の国家買い上げやフランス美術編纂について、今後さらに調査し、明らかにしていきたい。

他方で、1890 年代において印象派、新印象派、象徴主義の前衛美術が混淆して語られた状況を考察し、ジェフロワの「印象派の歴史」が執筆される当時の潮流を明らかにする論文(「混淆するイスム(-ismes) 1891 年におけるフランス前衛画家たちの布置」国立新美術館編『今、絵画について考える』水声社、2024 年、163-194 頁)を執筆し、論文集として刊行することができた。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1．発表者名 亀田晃輔
2．発表標題 印象派を歴史化する 美術史編纂と1900年のパリ万国博覧会「100年展」をめぐって
3．学会等名 日仏美術学会
4．発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1．著者名 長屋光枝、杉本渚、大島徹也、沢山遼、亀田晃輔、加藤有希子、小野寺奈津	4．発行年 2024年
2．出版社 水声社	5．総ページ数 287
3．書名 今、絵画について考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------